

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02820

研究課題名(和文) 占領地・植民地における<グレーゾーン>問題の国際比較研究

研究課題名(英文) International comparative study of <gray zone> problems in occupied areas / colonies

研究代表者

高綱 博文 (takatsuna, hirofumi)

日本大学・通信教育部・教授

研究者番号：90154799

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、占領地・植民地における支配権力への協力者と現地民衆のあり方に「グレーゾーン」を想定して国際比較の視点から検討することを試みた。国際シンポジウム及び研究会を開催し、ナチ占領下フランス、日本占領下の中国、日本植民地下の台湾・朝鮮などにおける「グレーゾーン」問題について比較研究を実施した。研究成果は、『史潮(新78号)』、『アジア遊学(205号)』、『現代中国研究(39号)』などに「グレーゾーン」をテーマとする特集として掲載した。「グレーゾーン」の研究は新たな発見を生み出す有力なアプローチであるが、同概念は多義的であり歴史学の分析概念としては更なる検討・陶冶が必要であることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research is an attempt to investigate the status of local populations and cooperators with controlling powers in occupied territories and colonies from an international comparative perspective based on assumptions of gray zones. International symposia and research meetings have been held to conduct comparative research on the issues of gray zones in Nazi-occupied France, China under Japanese occupation, Taiwan and Korea under Japanese colonial rule, and other regions. Research results have been published as special features addressing gray zones in "Shicho (New 78)", "Ajia Yugaku (205)", and "Modern Contemporary Chinese Studies (Vol. 39)". Research on gray zones is an effective approach for making new discoveries, but the concept is multifaceted, and it has become clear that further investigation and refinement is needed as an historical analytical concept.

研究分野：人文学

キーワード：グレーゾーン 協力者 占領地 植民地 国際比較

1. 研究開始当初の背景

近年の歴史学はナショナリズムを背景とした敵/味方、協力/抵抗、支配/服従などの二分法的歴史認識の行き詰まりを、いかに克服するかを喫緊な課題としている。特に、帝国主義支配に抵抗する民族解放運動やファシズム支配に抵抗するレジスタンス運動という既存の枠組みにおさまりきれない占領地・植民地における複雑な政治空間と政治過程を考察するところの歴史学の新たな方法が求められている。

帝国主義やファシズムの支配への対応の一つとして提起されたものとして「グレーゾーン」(grey zone)という概念がある。それは抵抗と協力の狭間＝中間項ともいべきものであるが、それは利己主義かつ日和見主義(opportunism)の典型として見なされることも多く、このような概念を設定することの意義は歴史学界においても十分に理解されていないといえよう。

2. 研究の目的

ファシズムや帝国主義の支配への対応の一つとして提起された「グレーゾーン」という概念は、抵抗と協力の中間項ともいべきものであるが、それは利己主義かつ日和見主義(opportunism)の典型として見なされることも多く、このような概念を設定することの意義は歴史学界においても十分に理解されていない。本研究は、ファシズムや帝国主義の支配を受けて、アイデンティティの確保が極めて困難な条件下で毎日の生存自体が切迫した課題となるような状況において、現地エリート層や民衆にとって「グレーゾーン」は主体的な積極的な選択肢の一つであったことを歴史的に検証することを試みるものである。

3. 研究の方法

占領地・植民地における「グレーゾーン」問題のそれぞれ地域の専門研究者たちを横断的・国際的に組織し、「グレーゾーン」

概念について国際比較を行いながら徹底的に議論・検討し、占領地・植民地における歴史研究の新たなフレームワークを提示しようとするものである。そのために、定期的に「グレーゾーン」問題に関する研究会及びワークショップを開催する。その研究成果は学会誌や研究書等で逐次公表する。

4. 研究成果

本研究は、占領地・植民地における支配権力への協力者と現地民衆のあり方に「グレーゾーン」を想定して国際比較の視点から検討することを試みた。国際シンポジウム及び研究会を開催して、ナチ占領下フランス、日本占領下の中国、日本植民地下の台湾・朝鮮などにおける「グレーゾーン」問題について比較研究を実施した。その研究成果は、『史潮(新78号)』、『アジア遊学(205号)』、『現代中国研究(39号)』などに「グレーゾーン」をテーマとする特集として掲載した。「グレーゾーン」の研究は新たな発見を生み出す有力なアプローチであるが、同概念は多義的であり歴史学の分析概念としては更なる検討・陶冶が必要あることが明らかになった。

占領地における一般民衆の「抵抗」とも「協力」ともつかない曖昧な態度、即ち「愛国」でも「売国」でもない中間的な態度を、「グレーゾーン」という言葉で捉えて、戦時上海における中国文化人研究における「グレーゾーン」問題を最初に提起したところのポシュク・フー氏であった。彼は自らが使用する「grey zone」という概念が、イタリア現代文学を代表する作家の一人であるプリモ・レーヴィ(1919~1987年)が1986年に発表した作品「灰色の領域」(Primo Levi, *The Drowned and the Saved*, New York, 1989.)によるものであることを明らかにしている。こうした経緯を考えると私たち研究者が使っている「グレーゾーン」という言葉はプリモ・レーヴィの「灰色の領域」に一つの淵源があるものといえよう。今日、「グレーゾー

ン>という言葉は、占領地や植民地研究においてさまざまに使用されるようになっていくが、その淵源の一つであるレーヴィが本来、それをどのように使ったのかについては見しておくことは必要であろう。

プリーモ・レーヴィは、1919年にトリノに生まれたユダヤ系イタリア人であり、第二次世界大戦末期にレジスタンス運動に参加し、逮捕された彼はユダヤ人であることを明かしたためにアウシュヴィッツに送られた。彼はアウシュヴィッツをкаろうじて生きのび、戦後は郷里のトリノにおいて化学者として働き、自らのアウシュヴィッツ体験を多くの作品として発表してきた。彼の『溺れるものと救われるもの』の最も重要な章は、ユダヤ人を抹殺する目的で設置された悪名高いアウシュヴィッツ＝強制収容所（ラーゲル）内部の複雑に絡みあった「小宇宙」を描いたところの「灰色の領域」であり、それを読むものに強い衝撃を与えるものである。

レーヴィは、歴史を敵と味方という二分法で捉えることに次のように警鐘を鳴らしている。「敵と味方という二分法はすべてのものに優先している。人々の間で語られる歴史、そして学校で伝統的に教えられる歴史は、この二分法的な傾向を非常に強く見せていて、あいまいな分け方や複雑な混成を忌み嫌っている。」

彼はそしてラーゲルの内部について言及し「内部の人間関係の網の目は単純ものではなかった。それを犠牲者と迫害者という二つのブロックに還元することはできなかった。……敵は周りにいたが、内部にもいた。『私たち』は自分自身の境界を失い、敵対する側は二つでなく、境界線は見分けられず、数多くあり、混乱していて、おそらく無数あり、個人と個人の間にかかれていた。そこには少なくとも、同じ不幸な境遇にいる仲間たちの連帯感を期待して入るのだが、期待した同盟者は、特別な場合でない限り、存在しなかつ

た。そうではなく無数の密封された単子があって、その単子の中で隠された、絶え間ない戦いが行われていた。」

レーヴィによれば、アウシュヴィッツには何の特権も持たない最底辺の囚人たちも多数いたが、それ以外にナチに協力することで少しでも生き残りの可能性を求めた囚人たちもかなりいて複雑な社会をつくっており、単純な二分法ではラーゲル内部の「灰色の領域」は見落とされてしまうという。要するに、「灰色の領域」の中では抵抗する者と協力する者、犠牲者と迫害者、善人と悪人というように二極に分けることは不可能であり、被抑圧者は抑圧する側になることもしばしば起こったという。レーヴィは権力に協力した者に対して「性急に道徳的な判断を下すのは軽率」であり、「明らかに、最大の罪は体制に、全体主義国家の構造自体にある」という。

レーヴィが、アウシュヴィッツという人間の極限状況で描いた<グレーゾーン>問題は、人々が支配・抑圧される占領地や植民地においても程度の差はあれ、同様に見られ現象であった。ポシュク・フー氏は、レーヴィが提起したところの<グレーゾーン>問題について、中国の伝統的文人の歴史上の動乱時代における態度「忠」・「降」・「隠」を参照しながら日本の侵略に直面した当時の上海知識人の道徳的・政治的な選択の問題として論じた。彼は上海知識人の対応には抵抗(resistance)と協力(collaboration)以外に、忍従・隠遁(passivity)という選択枝があったと指摘している。まさに抵抗と協力の狭間にある忍従・隠遁という態度こそ、<グレーゾーン>である。

本研究は、ポシェク・フー氏、古厩忠夫氏、尹海東氏による<グレーゾーン>問題の提起を契機とする近年における日中戦争期における日本占領下中国の<グレーゾーン>と植民地期朝鮮の<グレーゾーン>に関する研究動向を概観しながら、侵略戦争によつ

て強要された占領地と帝国主義によって日常性に支配された植民地における〈グリーゾーン〉問題を考察するための作業試論である。

本研究が検討対象としている〈グリーゾーン〉とは、帝国主義やファシズムの「支配」に対して「抵抗」と二分法では説明できない領域のことである。その「支配」は帝国主義やファシズムによる一方通行的な支配ではなく、被支配者との相互関係によって維持されるものであり、ここに「協力」(collaboration)の問題が提起される。「協力」とは支配者＝「敵」と一緒に働くことを言うが、支配者に対する協力者の献身的且つ理念的な一体化が伴う〈積極的協力〉から多くの現地住民が支配体制に対して「順応」または「適応」しながら暮らしていた〈消極的協力〉に至るまで大きな幅があるといえよう。

そして、占領地と植民地では「協力」のあり方も異なっていると考えられる。前者は軍事的占領により強要されるが、その「協力」は民間レベルの協力問題であるとともに協力政権(regime)問題としても発現した。そして、「協力」といっても占領当局と協力政権へのそれは同じものでなかった。一方で植民地における「協力」は、統治体制や統治政策と密接に関連しており、被統治者の協力が日常化する「構造的協力」の問題が重要となる。占領地と植民地においては、その支配が長期的に継続しないことが予想される前者と永続性が想定される後者では、被統治者の意識も同一ではなく、「協力」のあり方も異なってくるものといえよう。

占領地・植民地における政治空間と政治過程は、敵/味方、協力/抵抗、支配/服従などの二分法的な歴史分析ではその複雑多岐な歴史像を捉えることは困難である。そこで提起されたのが「抵抗」と「協力」の狭間＝中間領域である〈グリーゾーン〉への着目である。

本研究は、占領地中国と植民地朝鮮における〈グリーゾーン〉研究を概観してきたが、日本帝国主義支配下において毎日の生存自体が切迫した状況において、またアイデンティティの確保が極めて困難な条件下で、現地エリート層や民衆にとって〈グリーゾーン〉は主体的な積極的な選択肢の一つであったことが明らかにされている。

私たちはこのような研究動向を継承・発展させて、ナショナリズムに基づく愛国/売国の二分法的な歴史認識を止揚し、占領地や植民地における複雑・曖昧な〈グリーゾーン〉事態を分析的・客観的に把握することに努め、一般民衆だけでなく地域エリートや資本家、テクノクラート、政権担当者などを問わず、その「抵抗と協力の狭間」にある彼らの態様・行動の発現と展開を当時の政治・社会構造と歴史的コンテクストにおいて検証することが求められているものと考えられる。

本研究の過程で、西洋史・東洋史の若手研究者により「グリーゾーン研究会」が組織され、本研究の成果を継承しつつさらに研究を発展させることになった。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

高網博文「占領地・植民地における〈グリーゾーン〉国際比較」、『史潮』新78号、2015、査読無、2-3

高網博文「上海最後の日文報紙打『改造日報』」、上海社会科学院歴史研究所『史林』2017年1期、査読有

高網博文「占領地・植民地の〈グリーゾーン〉問題について」、日本大学通信教育部『研究紀要』30号、査読無、2017、123-144

高網博文「戦時上海・グリーゾーンについて」、『現代中国研究』39号、査読無、2018、2-9

〔学会発表〕(計4件)

高綱博文「占領地・植民地における<グレーゾーン>」歴史学会・日本上海史研究会、2015

高綱博文「グレーゾーンとしての戦時上海」日本上海史研究会、2016

高綱博文「対日協力政権のグレーゾーン」中国現代史研究会・日本上海史研究会他、2017

高綱博文「戦後上海の選択」日本上海史研究会、2018

〔図書〕(計2件)

高綱博文他『戦時上海のメディア』

研文出版、2016、4 - 17、243 - 260

高綱博文他『戦時上海グレーゾーン』

勉誠出版、2017、43 - 57

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高綱 博文 (takatsuna hirofumi)

日本大学・通信教育部・教授

研究者番号：90154799

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()